看護計画を重視したクリニカルパスとカンファレンスに対する看護師の意識と在宅復帰率への効果を検証する

福岡県　医療法人　井口野間病院　〇牛根嘉孝（Ns）

松尾理恵（Ns）

砥綿拓男（Ns）

**【目的】**

2017年に当病棟でパスや中間カンファ、プライマリーナーシングが導入されて以降、前回の研究によりパスが活用されていない現状が分かった。精神科におけるパス活用の難しさを打破すべく、今回、項目を一気に減らし、看護計画を重視したシンプルなパスを導入する事と、看護計画の評価が可能なカンファの充実を図る事で、看護師の意識変化、在宅復帰率への効果を検証する。

**【方法】**

本件研究参加者には、研究目的、方法、参加拒否による不利益はない事、個人情報保護について、文書と口頭で説明を行い、同意を得た。2018.11月より疾患パスを急性期治療病棟パスへ統合し、項目は看護計画や各評価など治療上最低限のものとした。また、中間カンファでアウトカム評価を行い、カンファでも看護計画を発表・評価できるシステムを構築した。検証として①研究期間中当病棟に勤務した看護師１３名を対象とした意識調査アンケートを2018.11月、2019.4月、7月に実施し②厚生局に準じた在宅復帰率の集計を行なった。

**【結果】**

①意識調査の結果33％の看護師が退院まで複雑さを感じない方向へ転じた。また、各種評価も44％強化され、連携の頻度も18％増加したとの結果であった。初回のアンケート記述には、バリアンス発生時にも問題が発生しにくくなったとの記述があったが、最終のアンケート記述には、退院までの流れがより明確になりやる事が増えたとの記述があった。②在宅復帰率を新パス導入前後で調査した結果、平均63％から81％へ向上していた。

**【考察】**

今回の取組みで、専任看護師が患者様・ご家族を援助するための個別性のある看護計画の作成に時間をさく事ができ、計画評価の強化・多職種連携の強化・在宅復帰率の向上につながったと思われる。

**【結論】**

看護計画を重視したこれらの取り組みは、看護師の意識を変化させ、プライマリーナーシングの機能を高める事にも繋がった。今後は、看護計画の発表に至らないカンファ、的外れの看護計画に対するアプローチが課題である。